「恐怖！巨大殺人電気クラゲ！」

―二稿―

2026/6/20

〈人物表〉

倉田（くらた） 祐介（ゆうすけ）	（３０）	海水浴場のライフセーバー
北嶋（きたじま） 花香（はなか）	（２７）	祐介の交際相手
葉山（はやま） 海（かい）	（３８）	海洋学者
百田（ももた） 康二（こうじ）	（３０）	葉山の助手
原田（はらだ） 龍臣（たつおみ）	（１７）	海水浴に来た高校生
久山（ひさやま） 亮二（りょうじ）	（５９）	市の観光課長

1.

久里浜海岸海水浴場（昼）

夏真っ盛り。多くの海水浴客で賑わう。

欧米系の人々の姿もちらほら。

2.

海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

海水浴場の外れにある四、五メートル程の小高い岩。

高校生の男女グループ、岩の上に登っている。

その一人、手を挙げ、海へ飛び込む。水飛沫。

すぐさま海面に顔を出し、仲間に手を振る。歓声。

と、笛の音。

3.

海水浴場・監視デッキ（昼）

監視員、メガホン片手に笛を吹いている。黄色地に赤字で「LIFE GUARD」と書かれたTシャツ姿。

監視員「ちょっと、そこ飛び込み禁止ー！」

4.

海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

高校生たち「いっちゃえ、いっちゃえ」

監視員の声にたじろぐも、次々海へ飛び込んでいく。

5.

海の中（昼）

無邪気に海に浮かぶ高校生たちの姿。

その様子を水中から眺めている何者かの視線。

6.

海水浴場（昼）

北嶋花香（２７）、サングラスと派手なビキニにパーカーを羽織り、パラソル付きの椅子に座っている。

ふと読書の手を止め、手に持った双眼鏡を覗く。

次々飛び込んでいく高校生の姿。

祐介の声「なにしてんの」

双眼鏡を外すと花香の背後には倉田祐介（３０）。

監視員と同じ黄色いTシャツ姿。

花香「……いいの？　見てなくて」

祐介、花香のパーカーを軽く脱がし、肩に手を置く。

祐介　「……ようやく交代だよ」

花香、祐介にエルボー。

祐介、慣れた手つきでかわし、懐から日焼け止めクリームを取り出す。

7.

海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

海の中には数名の高校生ら。

高校生「おい龍臣、早くしろよ！」

岩の上には、原田龍臣（17）。残るは一人だけ。

龍臣　「うるせー、今行くってんだよ」

ビビって躊躇するも、意を決して飛び込む。水飛沫。

8.

海の中（昼）

龍臣、海の中でぎゅっと目を瞑る。

何者かの視線、さらに近づいている。

9.

海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

龍臣、なんとか海の上に顔を出す。

皆、あまり見ておらず、泳いで浅瀬へ移動している。

龍臣　「おい、待てって」

龍臣、不慣れな泳ぎであわてて追いかける。

10.

海の中（昼）

龍臣の不恰好なバタ足。

その背後、巨大な透明の触手が龍臣の足を掠める。

11.

海水浴場の外れ・遊泳禁止エリア（昼）

龍臣、はっと気づく。何かに足を取られた様子。

龍臣　「ちょっと、た、助けて」

皆、気づかずはしゃいでいる。

ビリビリという電気音。

12.

海水浴場（昼）

祐介、花香の背中に日焼け止めを塗っている。

花香の水着のホックを外す。

花香　「ちょっと」

祐介　「……いいじゃん、退屈してんでしょ」

花香　「……まあ、そうだけど」

祐介、ニヤリと笑い、花香の背中に手を伸ばす。

と、海の方から悲鳴。

高校生の声「きゃあああ」

祐介、花香から双眼鏡を取り上げ、覗き込む。

13.

海水浴場・浜辺（昼）

浜辺に仰向けの龍臣、意識がない。周りに人だかり。

高校生の一人、心臓マッサージ。騒然とする人々。

14.

海水浴場（昼）

祐介、一目散に走り出す。打って変わり真剣な表情。

あっけに取られ花香、体を起こし浜辺の方を見る。

ややあって、ようやく気づいて胸元を隠す。

15.

海水浴場・浜辺（昼）

祐介　「おい！　貸せ！」

と、高校生に代わり懸命に心臓マッサージ。

しばらくして龍臣、水を吐き出す。安堵の声。歓声。

龍臣の足には何か巻き付いたような黒焦げ跡。

祐介、眉をひそめる。

16.

丸バツ大学・葉山研究室（昼）

所狭しと置かれた水槽。様々な種類の魚。

その一角、葉山海（38）がカップ麺を啜りながらPCでSNSを回遊。画面には心臓マッサージする祐介をスマホで撮影した映像。

一時停止。葉山、龍臣の足元の黒焦げ跡に注目。

葉山、ラーメンを啜る手を止め、目を見張る。

助手・百田康二（30）が台車を引いてくる。

百田　「先生、電気ウナギの直列接続、五匹に増やしました。実

験準備完了です」
台車の上には巨大水槽。中には五匹の電気ウナギ。
頭と尾が電極と電線で直列に繋がれている。
葉山、聞いていない。

百田　「今日はサユリが機嫌悪くて手こずりましたよ。すぐ電極外しちゃうんだから」
壁には電気ウナギの写真。「サユリ」「エリ」「レイナ」など一匹ずつ顔と名前が貼られている。
葉山、バッと立ち上がって、

葉山　「実験は中止」
百田　「ええっ」
葉山　「フィールドワークだ。久里浜行くぞ」
と、荷物をまとめ、研究室の外へ。
百田　「せっかく繋いだのに。あ、サユリ、こら」
水槽のウナギ暴れ出す。電極が外れる。、
百田、慌てて水槽の中に手を入れた途端、
百田　「あああああああああっ」

17.　海水浴場・規制線の前（昼）

遊泳エリアの前には規制線。
祐介、「遊泳禁止」の立て札を打ち込む。
規制線の前には大勢の海水浴客。落胆の声。
クールビズ姿の市の観光課長・久山亮二（59）、
職員を引き連れやってくる。規制線を潜り抜け、

久山　「なーに勝手なことやってんの？」
祐介　「見たら分かるだろ」
久山、職員に顎で指示。規制線を撤去。
祐介　「おい！」
続いて「遊泳禁止」の立て札を撤去。
祐介　「安全あっての海だろ？　高校生が一人溺れたんだ」
久山　「そういうのは、観光課が考えんの」
続々と来る職員、ネットとポールを持っている。
久山　「ヤツが浅瀬に入らないようネットを置く。それで十分」
祐介　「ヤツ？」

職員の声「いましたー！」
と、ダイバー姿の職員がバケツ片手に久山の元へ。
二人、バケツを覗き込む。
中には手のひらサイズの小さなクラゲが数匹。
祐介「……電気クラゲだろ？　溺れるほどの毒じゃない」
久山「今の子はそんだけナイーブってことね」
職員「まだまだ結構いるみたいです」
祐介「……なんでまた急に」
職員「多分、バラスト水でしょうね」
と、港の方を指差す。

18. 久里浜港（昼）

浜辺から見える港。一隻の巨大なコンテナ船が停泊。
職員の声「発電所の改修資材をアメリカから持ってきたとかで、先週から停泊してるそうです」
祐介、双眼鏡で船を見ると、コンテナの荷下ろしが行われている。船尾の煙突には「Burgess」の文字。停泊している岸壁には人だかり。「バージェスは出て行け」「日本の電気を盗むな」などの立札を持った市民らの集まりが抗議活動をしているのが見える。
祐介、双眼鏡を握る手をギュッと強める。

19. 海水浴場・規制線の前（昼）

祐介「……クラゲぐらいで文句言えないってか」
久山「もはやバージェスのお膝元だからね」
祐介「植民地だろ」
久山「違う。久里浜は巨大資本との共存共栄を選んだ先進都市」
と、肩を寄せる。
久山「……来週の花火大会、バージェスのおかげで今年はド派手にやるからね。アメリカからお偉方も沢山観に来る。何も海閉めることないでしょって」
祐介「……お前何言ってるか分かってんのか？」
二人、睨み合う。
葉山の声「あった、コレコレコレ！！」

２０．**海水浴場・浜辺（昼）**

葉山、何か見つける。

浜辺に打ち上げられたブヨブヨとした透明な円柱状の物体。大根ほどの太さ。百田、写真を撮る。

２１．**海水浴場・規制線の前（昼）**

祐介「……なんだアイツら」

久山「ほっといて。丸バツ大の変人教授」

２２．**海水浴場・浜辺（昼）**

葉山ら、透明な円柱を持ち上げようとして難儀。

２３．**海水浴場・規制線の前（昼）**

久山「まあ、対策はしたじゃない」

海の方では着々とネットの設置が進んでいる。

祐介「まだ電気クラゲが原因か分かってないだろ？　その子、足に焦げみたいな跡があって――」

久山「日焼け止め塗ってなかったんじゃないの」

職員ら、規制線の撤去も終える。

久山「午後からまた楽しい海水浴ね」

職員ら、海水浴客をネットの方に誘導。

歓声。大勢の海水浴客ら、一斉に海へ。

祐介、唇を噛む。

２４．**市立病院・龍臣の病室（夕）**

龍臣、ベッドで眠っている。

葉山と百田、龍臣の足にできた黒焦げ跡と円柱の太さを重ね合わせ、ピッタリであることを確認。

葉山「……一致する」

看護師、それを止めようとして、

看護師「やめてください。意識が戻るまで面会謝絶です」

祐介、病室にやって来るなり目を丸くして、

祐介「な、何してんだよ」

と、一緒に葉山らを取り押さえる。

葉山　「もうちょっとだけだから！」

25.　市立病院・廊下（夕）

三人、廊下のベンチに座っている。

百田　「なるほど。命の恩人というわけだ」

祐介　「……だから一応、見舞いに来たんだけど」

葉山　「素晴らしい！」

と、祐介と握手。やけに興奮している。

葉山　「君のおかげでサンプルが灰にならずに済んだ」

祐介　「サンプル？」

葉山　「君もあの黒焦げが何か、知りたいだろう？」

祐介、頷く。

26.　久里浜海岸海水浴場（夕）

ネットの内側。何事もなかったかのように賑わう。

その一角、ビーチボールを回して遊ぶ少女ら。

ボールが逸れて、少女の一人、取りにいく。

27.　海の家（夕）

店の一角。百田、テーブルにブルーシートを広げる。

例の円柱を載せ、電極に繋ぐ。

近くの客ら、悪臭に顔をしかめる。

花香　「ナマぐさー」

祐介　「一応、飲食店だぜ？」

葉山と百田、ビニール手袋を手にはめる。

百田　「離れてください」

百田、何やらカチッとスイッチをオン。

電極に電流が走る。眩い光、ビリビリ音、煙。

花香　「からのコゲくさー」

祐介　「飲食店なんだけど！！」

百田、手元の機械の目盛りが振れている。

百田　「抵抗値、出ました」

葉山　「……予想通りだな」

百田、次はノギスで円柱の大きさを測定。葉山に伝える。葉山、壁に何やら計算式を書き出す。

祐介「あのさあ、何してんの？」

葉山「……人間の皮膚を黒焦げにするには摂氏五百度が必要だ」

祐介「ん？」

葉山「仮にこれが生物の断片だとして」

28. 海の中（夕）

何者かの視線、ネットを潜り抜け、ビーチボールを取りに行く少女の足を捉える。

29. 海の家（夕）

葉山「そいつが発電細胞を直列に並べることで電圧を増幅させているとするならば」

葉山、書くのをやめ、指先で暗算。

葉山「抵抗値を元に摂氏五百度に達するのに必要な全長を推定することができる」

と、何か答えらしきものを記す。

葉山「……なるほど」

30. 海水浴場（夕）

少女、ボールを掴むや否や、何かに足を取られる。

葉山の声「最低でも全長、三十メートルは必要だ」

31. 海の家（夕）

海から悲鳴。祐介、ダッと駆け出す。

32. 海水浴場（夕）

海水浴客ら、騒然。

ネット、破かれ、巨大な触手が何本も浅瀬に侵入。

少女、触手に捕まれ、空高く放り出される。

少女「きゃあああああ！！！」

祐介、目を見張る。

（おわり）